

強姦する

陽羅 義光

なんともはや殺伐としたタイトルだが、この事柄は一度は書いておかないといけない。

強姦は、強制や強圧や強権と並んで、古往今来永遠のテーマだからである。

『ギリシャ神話』にも強姦話は出てくるのだから、根は深い。

女私立探偵・ウォーショースキーが活躍する人気シリーズの作者、サラ・パレッキーは、そのエッセイ集のなかでこう書いている。

【レイプに対する意見を語る会が初めてひらかれたのは一九七一年だった。若かったころ、わたしたちはしばしば「レイプから逃げられないときは、抵抗をやめて楽しむことだ」といわれたものだった。このスローガンは、避けることのできない、いささか不愉快な事態に対処するときの方法として、一般に使われていたが、その裏には（女はひそかにレイプを望んでいる）という含みがあった。

レイプ裁判で弁護側がしばしば使って成功を収めているのが、女性にはレイプへの憧れがある、現代心理学によって女性のレイプ願望が立証されている、女性は憧れを現実のものとするために、レイプ犯の前に身を投げ出すのだ、という主張である。このような主張をされると、自分の恐怖と、願望と、自分に押しつけられたものを区別するのは、多くの女性にとって困難になる。七〇年代に、こうしたきわめてむずかしい問題に力を合わせて立ち向かうために、女性たちはレイプ被害者救済センターや家庭内暴力対策センターを組織しはじめた】

たしかに性犯罪に立ち向かうためには、組織が不可欠と思われる。

女がひそかにレイプを望んでいる、としたなら、男もひそかにレイプを望んでいる。

けれども言葉通りほどには単純ではない。

なぜなら、女も男も、いわゆる一般に云われる「選ぶ権利」があるからだ。

百歩譲って、男も女も「レイプを望んでいる」としても、醜男や醜女や性病持ちや狂人や不慮者や後期高齢者相手は、御免だろう。

なかには特殊な嗜好を持つ変態もいるだろうが、今回のテーマの場合では例外とする他はない。

(『聖書』に異議を唱えることになるのかもしれないが) ここで重要なのは、望んでいることと、被害に遭うこととは、別次元の問題だ、と云うことである。

望む次元では、具体的な痛みも具体的な怖れも具体的な不快感も、さらに具体的に云うなら、具体的な相手の動きも具体的な相手の息づかいも具体的な相手の体臭も、まったく無いのであるから。

いつだったか、多くの舌禍事件のみで有名なイタリアの首相が、「イタリアは可愛い女の子が多いからレイプ事件も多い」〈風な〉ことを口走ったそうだが、そんなこと口走るヒマがあったら、可愛い女の子は髭を付けることを義務づける法律を作るとか、可愛い女の子には手をつけない〈風な〉AKB オタク戒律でも普及させたほうがいいだろう。

それと性教育。

もしレイプに遭いそうだったら、相手にどう対応するか、どう云うかくらいは教えておくべきだろう。

「ひとつ聞くけど、お母さんの了解はとってあるの」とか、「もしかして、あんたもレイプで産まれたの」とか、「ごめん、エイズがうつってもよければ、どうぞ」とか、ああ云えばこう云うとか。

仮に女がレイプを望むとしたなら（実際にそうした例は少なくはないのだが）あくまでも、見ず知らずの醜男や狂人ではなく、ほのかに好意を抱く相手なのだ。

その例として、ここではなるべく新しい小説、小手鞠るいの『欲しいのは、あなただけ』を取り上げる。

これは作者の「ほぼ実体験小説」である。

もちろん小説として優れていると云う判断基準で取り上げたわけではない。

【たとえばこの人なら、わたしがとても大切にしているものを取り上げられ、滅茶苦茶に壊されたとしても、わたしは決して怒ったりしないだろう。まだそれほど親しい間柄になっていなかったころから、なぜだか、そんな確信めいたものがあつた。いいえ、むしろ、壊されてみたい。一番大切にしているものを、この無垢な獣のような人の手で。弄ばれ、

蔑ろにされ、徹底的に、破壊されたい。そういう願望を持った女が、自分のなかに棲み着いていることに気づくまでに、それほど長い時間はかからなかった】

ここで大切なのは、「この人なら」という部分である。

裁判などでもよく「合意の上」と云う言葉が使われるが、強姦的な行為でも確かに合意の上はあるんであって、ただ問題は「この人なら」との意識が被害者にあったのかどうかの一点だ。

「この人ではない」男に、強姦され、あげく殺害されたら、これほど悲惨な悲劇はない。

被害者はショックの大きさゆえに、そうそう他人に（身内でも）相談することはできないのだが、仮に相談しても、「どうして大声をあげるとか激しく抵抗しなかったのか」「なぜ一人でそんな危ない場所に行ったのか」なぞの、（あくまでも当人にとっては）頓珍漢な答えが返ってくることが多い。

つまり実際被害に遭った者にしか解らない辛さを周りが理解できないことが多いのだ。

凶悪事件の犯人に惚れると云うパターンはないわけではない。

それは「ストックホルム症候群」と云われる。

けれども「ストックホルム症候群」は、稀の中の稀な事態であって、わざわざ持ち出すべき件でもない。

サド・マゾに関しては、大なり小なりその傾向を誰でもが持っているかもしれないが、小に比べれば大は僅少であろうから、これも今回は論外とする。

性欲や性志向の行き着く先が、強姦になると云う発想は、組織だけでは解決されない。

まずは、児童からの教育方法を変えること、それから刑法を変えること。

失業ゆえに極貧ゆえに結婚もできぬ、それでも五体満足の男達が富裕層の女を集団で強姦する、なんてことが頻繁に起こる国もあるが、これは性欲や性志向の問題よりも、憎しみ、怒り、不満の要素が強く、大きく、これはこれで政治的解決が必要になる。

かつてイギリスの軍隊が、兵隊たちに性欲抑制剤を飲ませたと聞いた

ことがあるが、そんな安易なレベルで解決されるほど性犯罪の問題は浅薄ではない。

日本の刑法は、日本の裁判は、それ以前に日本の国民は、麻薬犯罪と性犯罪に関して、まだまだまだまだ甘すぎる。

その根底には、もしかすると自分も同類の事件を犯すのではないかと云う潜在的な恐れが在ると、世俗の快樂志向（アルコール産業の拡大や風俗事業の蔓延など）が快樂犯罪の脅威性と驚異性を奪ってしまっている気がしてならない。

「強姦殺害」（個人であれ集団であれ、計画であれ突発であれ）は、どんな酌量の余地があろうとも、総て死刑に処すべきだが、（未知の女性に対する）「強姦致傷」も、冤罪の可能性がゼロであったならば、総て死刑に処すべきだ。

死刑廃止のシビアな論議は、俎上にあげての話ではあるが。